遺産にふれる、歴史を感じる

～庄内平野を潤す北楯大堰～

（庄内町）

水土里ウォーク特集　歩いてふれる、足から感じる

北楯大堰の開削

今から400年ほど前、山形県北西部に位置する庄内町は、周囲の河川より標高が高く、水不足に苦しんでいた。この状況をなんとかしようと決意した北館大学助利長公（きただてだいがくのすけとしなが）は、慶長17年3月に工事を開始。約4か月の難工事の末、10キロメートルを超える北楯大堰が完成した。その後の整備によって、総延長は32キロメートルにも及んだ。

以降、補修や改修が行われてきたが、一部区間には今もなお石積み水路の姿が残っている。2018年8月には、県内ではじめて「**世界かんがい施設遺産**」に登録され、現在も、狩川から余目、酒田の農地を潤している。

歩いて感じる水路の歴史

今回は、沿線の歴史跡を散策しながら、水路沿い約2キロメートルを歩いた（詳細については左ページで紹介）。実際に歩いてみると、対岸側には急斜面が続き、水路が山際に位置していることがわかる。これらが4か月という短期間で開削されたことを考えると、北楯大堰は先人たちのはかり知れない努力によって造り上げられたことが感じられる。

北楯大堰上流部の清川（きよかわ）地域には、歩いて散策できる範囲に、様々な歴史的建造物が残っている。これらを巡りながら、かつての庄内に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

御諸皇子神社本殿へ続く石段

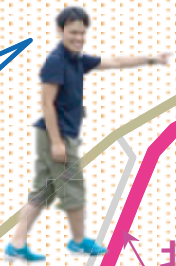
北楯大堰沿いを歩いてみた！

○官軍墳墓～青鞍之淵遺跡碑まで（約２km）の区間
○各地点の時間はスタート地点からのおおよその所要時間

工事中に亡くなった 16 名の
冥福を祈り建立された慰霊塔。

工事最大の難所。最上川の氾濫で工事続行は
不可能と思われたが、利長公が自らの馬の鞍を
投げ入れると流れが静まったという逸話がある。

幕末に活躍した清川八郎の墓や、
戊辰戦争戦死者らの慰霊碑がある。

源義経らが旅の一夜を明かした。
義経ゆかりの品や大絵馬がある。

戊辰戦争・清川口の戦いで戦死した
長州藩士２名が祀られている。